



柳 太 は ん の り

第15号

面打ちによって彫られた面は、
踊り手・囃子によって命を吹きこまれ
いきいきと躍動をはじめめる。

歴史散歩(秩父)

秩父の作物・植物

内野博司

秩父地方は、東京近郊にあつて、歴史的にみても興味のある所である。それ由に、多くの研究者によつて、調査・研究され、数多い報告や書籍が入手でき、一般的なことであれば、それらを見ればわかるであらう。

ところで、私は、通算十二年間秩父に勤務し、農業関係の仕事を行ってきたので、今回は、旧秩父郡であつた吾野地区を含め、秩父地域における作物や植物についていくつかをあげて、述べてみたい。

瓜の木について

飯能地方の江戸時代の古文書にしばしば瓜の木(又は瓜の木)のことが出て来る。又、新編武蔵風土記稿にも多くの山村の産品として瓜の木についての記載がある。しかし、瓜の木とは一体何で、そして何に使われたのかも不明であつた。先日、秩父市図書館長の千島壽氏と、飯能市郷土館長の浅見徳男氏のお話から、その正体が明らかになつた。

瓜の木とは、現在の標準和名はカエデ科のウリハダカエデで、飯能周辺の雑木林にはきわめて一般的に見られ、名のごとく木皮は緑色でウリのようにも見える。(他にウリノキ科のウリ

ノキがあるが、それほど多くはないのでたぶん違つてあろう。)

瓜の木は、燃やした時に煙が少なく、火力も強いので、江戸城の大奥で燃料用に使われていた。それらは、江戸時代の初頭から、多摩郡・高麗郡・入間郡・比企郡、そして、秩父郡などを割り当てられていた。村に納入したのを割られていた。しかし、二六〇年も続いた江戸時代であるので、だんだんと江戸近郊では穫れなくなり、秩父郡のみが主な供給地となつたそうである。



ウリハダカエデの葉

在来のジャガイモ

「中津川イモと紫イモ」

秩父地方に古くから伝わるジャガイモには、中津川イモと紫イモがある。二種類のジャガイモとも、ダンゴのように串ざしし、エゴマのみそだれをつい、田楽用のイモとして、大滝村の中津川地区や三峰神社の参道で地域の食品として売られて

いる。中津川イモは、大滝村の中津川に伝えられたジャガイモである。

中津川イモの来歴について二説を聞いている。第一の説は、甲州の武田氏滅亡の際に落人がこのイモを栽培すれば飢えることとはないとのことで、甲州から秩父にもたらされ、延々四百年間栽培され続けられたという説である。

第二の説は、日露戦争の時にロシアの捕虜として捕えられた人が帰国に持ち、ロシアのジャガイモをポケットに(二説にはフンドシの中に)しのばせ、中津川で栽培したのが始まりと言

う。第一の説については、九九バ



芋以下の大きさの中津川芋又は紫芋タシは、エゴマのミソダシ。

ーセント疑しい。コロンブスがアメリカに到達したのは一四九二年で、中南米原産のジャガイモが日本にもたらされたのは、一説に一五九八年で、ジャガイモのジャカルタからであった。一方武田氏が滅亡したのは一五八二年で六年早い。このことからロシア捕虜説に分がある。

一方の紫イモについての言い伝えはかなり広い地域、更には埼玉県境の群馬県界の山間部でも栽培されていたらしい。つまり、在来のジャガイモとしては、きわめて平凡な品種と思つては、わたが、数年前に神戸大学農学部の保坂氏から、日本の在来のジャガイモの来歴を調べたいとの依頼で、中津川イモと紫イモを送つたところ、きわめて興味ある事実がわかつた。

保坂氏は、日本の在来のジャガイモ三〇系統をDNA分析(遺伝子分析)をした。その結果、紫イモは現在栽培されている多くの品種のうち、世界で最も古い品種の一つであるということであつた。ジャガイモは、原産地である中南米からヨーロッパを経由して日本に伝えられたとされているが、ヨーロッパには、現在も紫イモ、タイプ

のジャガイモは消失している。そして、日本では、秩父のみ細々と栽培されている。(ただし、試験場にのみ数系統

が保存されている。)

そこで、現在まで紫イモが栽培され続けた理由について私なりの考察をしてみた。

一つは、その利用形態である。中津川イモについても言えることであるが、田楽イモとして串ざしにされるため、串ざしの時割れないこと、そして皮が薄いため皮ごと食べられること、肉質が粘質(いわゆるねっとりする)で、さらには、ウィルスに強いであろうこと(現在主流の男しやいモなどの品種は、何年か栽培するとウィルスに冒され、収量が年々減少する)が主な理由と考えられている。

ところで、秩父地方のジャガイモの方言として、サントイモ(三度芋)、シンシイモ(信州芋のなまりか?)がある。三度芋は、年間三回穫れることと由来している。ところが秩父地方では年二回しか収穫できない。(通常春植え→初夏収穫と初秋植→晩秋収穫)これはジャガイモの(あるいは名前)伝来が九州などの暖地からで、ここでは年間三回の収穫が可能である。

もう一つのシンシイモ(シンシウイモ)は、信州からもたらされたことによると考えられるが、飢饉の多かった江戸時代には、甲州・信州などで当地の代官である中井清太郎などが数荒作物としてジャガイモの普及

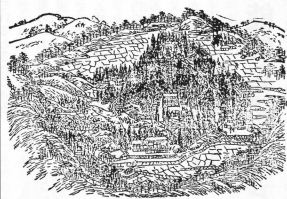
につとめたそうである。

松茸

江戸時代に編纂された新編武蔵風土記稿の中で、現在の吾野地区の坂元(かつては秩父郡)の記載中に、当村の土産として松茸とある。現在、飯能あるいは秩父地方では松茸はほとんど採れないが、土産として松茸について記されているところから考えるとかなりの量が採れたと想像される。

松茸は赤松があれば発生するわけではない。というのは、松茸は松の根に寄生する菌で、関東地方は一般に表土が厚く、(いわゆる表面が赤土で厚く、松の根が深く入るため、寄生できにくいと言われている)同文献の高山不動の絵図を見る

高山不動境内図



より(新編武蔵風土記稿)



なみに、コンニャクは、江戸時代の町衆にとって人気のある食べ物だったのとことである。

と、現在のように、その周辺には杉・松の植林は少なく、赤松?とも思われる樹が見える。読者はどう思われるだろうか?

高山コンニャク

現在、全国のコンニャクの生産は群馬県が七割以上を占めている。埼玉県も全国第五位の産地ではあるが、最も大きな産地は秩父地方である。新編武蔵風土記稿によれば、コンニャクの産地として秩父郡のいくつかの村々があげられている。

しかし、最も具体的に記載されているのは、秩父郡高山村のところで、『此山の名産は菫蕨にて、世に高山菫蕨と稱せり』と書かれている。高山不動の参詣者を対象としてコンニャクが売られたものと考えられる。ち

去る平成六年十月二十九日、飯能郷土史研究会主催で標題のバスツアーを実施した。多数の参加者を得て、盛会、有意義な旅であった。

私は、地質担当だが専門でないので、みなさんと一緒に勉強させていただくということでお伴した。

最初に寄居町鉢形城跡を見学。

秋の秩父路 自然と歴史を訪ねて 金子仙太郎

秋の秩父路

自然と歴史を訪ねて

金子仙太郎

城は町地上、荒川が一望でき蛇行や河岸段丘の様子が一目瞭然である。隙は蛇行の攻撃斜面に なっている絶壁を利用し、敵の進入を拒むようにつくられている。次は、長瀬周辺で野上下郷の板石塔婆を見学。高さ五メートル余り、幅一メートル余りの大きさを誇っている。緑泥片岩で、文字の内容、彫刻等みごとに上東谷から切り出され、運搬は「櫓」を使い四ヶ村の老若男女総出でやったという。石屋は「麦が黄色くなると、石工の本音で

はななろうか。次は法善寺で下車、徒歩で河原に出る。河岸一帯に広がる岩畳の中段に、こゝまた日本一という大きなポットホール(甕穴または、かめ穴)があり見学す。河原に集まって、ポットホールや、岩畳(結晶片岩)の成因勉強した。昔は狐狸のすみかではなかったが、明治のころ地質学者がこの地に入り、この特異な岩石を世界の学界に発表してから一躍有名になった。今では名勝(岩畳、天然記念物(紅崖石片岩)等)で研究者ばかりでなく、多くの観光客をひきつけている。次は長瀬自然史博物館を見学。ちよと秩父鉱山の特別展示会が催されていた。産出された鉱物の種類や鉱床の成因等、わか

秩父山地の地質区分



る。現在、自然銅が荒川流域の結晶片岩の中に薄い層状に入っていることが確認されている。果実では、和銅の産地は黒谷とされているが、これには諸説があり、はっきりしない。次は浦山ダム見学。橋立橋を過ぎると、車窓より秩父盆地の河岸段丘を眺めることができる。ダム見晴台に着くと建設現場が一望でき、説明板が置かれていて工事現場の概要がわかる。周囲の地質は秩父古・中生層で、チャート、粘板岩、輝綠凝灰岩



りやすい説明を加え、興味をそる展示であった。皆野町産センターで昼食。次は大塚古墳を見学。懐中電灯で石室に入る。人が立って数名入れる程の大きさで、河原の石でたつ結晶片岩である。

等が分布してゐるときれである。多目的ダムで東京ドーム四十五杯分の貯水量の巨大ダムとなる。平成八年完成をめざし急ピッチに進められている。詳細は、影森の浦山ダム建設事務所インフォメーションセンターに連絡すると説明案内をしていただけることである。

最後は秩父ミューズパークに行き、車内から施設を見る。長

秩父盆地の段丘分布図



(町田 貞, 1963)

尾根上に広がる平坦面は、秩父盆地の上位段丘に当る。音楽寺

飯能焼を語るつどい

会長 井上峰次

飯能市郷土館が、開館五周年を記念して飯能焼展を催した中で、「飯能焼を語る」座談会が行われた。

時折その話の輪の中にいたのが災いしてのことだった。

この種の催の常として、事前の打ち合せも行い、焦点がボケて話題が八方に散らないように準備した。また、飯能焼の深奥に少しでも迫れたら……などと欲張ったり、飯能焼展に花をそえ、この特展を盛り上げる効果も狙つてのことだった。

座談会とは言ってもシンポジウム形式をとり、講師三人の意見発表(二回)の後には、参加者の自由な発言が活発に出された会だった。そして、私がこの座談会の司会を引き受けさせられた。飯能焼を生かじりして、

講師の双木・田中・師岡の三方は、飯能焼、焼き物などの精通者として衆知の皆さん。その上、お三人の展開する持論は多少ずれているから、このシンポの進め方如何では、白熱の論議を期待するむきもあった。ところが、不慣れな私ではどうす

附近からは、羊山(中段段丘)や秩父市街地(下位段丘)が一望できる。秩父盆地を取り巻く山々の山麓を目で追い、秩父湾があったころ、白波がくだけけパレオパッドキア、クジラ、カメ、サメなどの棲息した様子を推測するのもおもしろい。

秩父公園橋を後にバスツアーは終了。参会の方々のご協力により無事初期の目的を達成する

秩父湾前半期の海のようす(初期中新世・今から2500万年前)



(埼玉地質ガイドより)

することも出来ない、歯車のかみ合わないバラバラの流れが出来てしまった。講師のお話には、熱のこもった持ち味を出したお話だったが、話が三方に広がってしまった。私は内心しめられた。私はずいぶん焦り、この時点の定まらないまま会が進行していった。

下手な司会で白けかかった座談会を、参加の皆さんが活発な質問、意見、主張で救つてくれた。飯能焼が誇る名人小四郎の絵付けについては、陶芸家の虎沢さん、岸さん等によって、白熱した論議が交された。また、白子の彫刻家滝さんからは、飯能焼が珍重されているのは用の美としてのか、焼き物としての美術的な質の高さか、と問題提起がなされ、柳野の大野さんは、矢風窯の岩沢重蔵氏(ヘイంతアビユー)した録音テープを公開して、矢風窯の古さや、原窯との比較について一石を投じた。

ことができた。後日、郷土館でバスツアーの復習会が開催された。会の後半は「秩父湾の一生」について学習。秩父地方が海底にあったころの海底堆積の様子や、海断外秩父が隆起したこと、活断層にも関連して学習した。バスツアー参加者でない方々にも参加をいただいたき有意義の会であった。

講師のお話と、参加者の意見等を司会者なりに集約することは、この座談会で提起されたことは、従来簡書きとされてきた絵付けは、イッチンでなければ描けないという指摘、原窯と矢風窯の関係と職人の掛け持ち往来のこと。生産、受注、出荷、などのこと。信楽、京との関係。陶土のこと。開窯、閉窯の経緯等、今後の解明に俟たなければならぬことが山積していると思えた。

飯能焼と云えば蔵原先生、吉良先生と、言葉が努力なされた。双木さんを誰もが思い浮べた。また、近年矢風窯等の調査研究に取り組んだ師岡さんも然り。その外多数の人々によって飯能焼は守られ、伝えられ、多くに紹介されてきた。それでもまだ幻の部分が多く、これからの取り組みが懸念されている。でも、それは杞憂に過ぎないと私は思っている。郷土史研が

開催したこの座談会前の先行行事として、プレシンポジウムと名付けた。研究報告会を行う。飯能市教育委員会の富元さんと郷土館の尾崎さんの若い二人が、熱のこもった研究成果の発表をしてくれた。お二人の体験を通して親た飯能焼への視点には、当を得たものを感じた。発掘から得たもの、また飯能焼展を担当した所見には、私達も飯能焼を解明してゆく前途への明るさを感じた。そして、頼もしくも思った。それから半月後の座談会だったが、不慣れな私達のため、郷土館が期待していたものは何も残せず、引き出すことも出来なかった。しかし、これが端緒になされ、この郷土の作陶がもっと明らかにすることがあったら、この会を催した意義は充分だし、私も司会者冥利に尽きるといえるものだった。

飯能焼展を終えて

— その成果と課題 —

飯能市郷土館
尾崎 泰弘

一、はじめに

飯能市郷土館では、平成六年四月二〇日から七月三日まで、特別展「幕末・明治の幻陶—飯能焼」を開催した。飯能焼は、飯能と名のつく数少ない文化財であり、また、まぼろしの陶器といわれ、謎が多いために市民の関心も従来から高かったため、今回は例年二カ月間であった会期を二週間長くしたものである。展示が終了して一年が経過しようとしているが、ここでは、この展示会がもたらした飯能焼研究における、成果と課題を簡単にまとめてみることにしたい。

二、展示にいたる経過

飯能焼をテーマとした特別展を行う以上、飯能焼とは何ぞや？ ということがまず問われなければならぬ。

飯能焼については、緑褐色や暗緑色に発色した釉に、白絵土で絵付けがされているものを特

徴とするという、最小公約的な定義が認知されているに過ぎない。

江戸時代後期において、イッチン描(筒描)による絵付けは全国的にみられたものであり、その技法をもって飯能焼と判断する絶対的な基準とすることはできない。

その一方で、郷土館で展示するという行為は、飯能焼の認定につながるが、飯能焼の特定が不可能な現状では、来館者に誤解を与える危険性がある。故に展示に際しては、特にその性格を明確にしておく必要がある。

そこで、今回は飯能焼研究の現状把握と課題の整理に重点を置き、これを契機に飯能焼の所在の確認と、台帳づくり及び関係資料の収集を最終的な目的とするにしたい。

つまり、これをもって新たな飯能焼研究の端緒とすべき特別展と位置づけることにしたわけである。

そのための調査では、所蔵者

の方にすべての所蔵資料の写真撮影と測量にご協力いただき、また未知の飯能焼所蔵者を開拓するため、「広報はんのう」の紙面にて所在調査を行いたい旨の告知を出した。その結果、特別展企画委員やその他の方々のご協力により、一七人の所蔵者、三二一点にもおよぶ点数を調査することができた。

その成果をもとに展示するものを決定したわけであるが、基本的には各所蔵者、最低一点は借用・展示することにした。

飯能焼の定義が曖昧な以上、その捉え方も人によって異なるため、今回の展示の主旨からいっても、飯能焼をかなり広い範囲で考えるべきと判断したからである。



三、展示の反響

特別展は、六三日間の開館期

間で、五月二九日をもって一部展示替えを行った。

入館者数は、二二、〇七二人、一日平均一九一、二二人を記録した。これはこれまでの春の特別展の平均入館者数の倍の数字にあたる。

今回、地元で関心が高かっただけでなく、朝日新聞や読売新聞、毎日新聞などにも記事が掲載され、多くのやきものファンが来館したことが、この結果につながったと考えられる。

館内には飯能焼についてのより多くの情報を提供してもらった。展示についての意見を聞く目的から「飯能焼ご意見カード」なるものを設置した。残念ながらこれからは少ない情報しか得られなかったが、しかし、いろんな方から聞接に、また時には直接に飯能焼についての説や、展示についての意見をうかがうことができた。

最も多かったのが、展示資料について、具体的に「これは飯能焼ではないのではないのか？」という疑問の声であった。中には「飯能焼と呼べるものはない点も展示されていない」というご意見の方もいらっしやうと聞く。

これは極端な例にしても、こういうことは当然あるものと考えていたし、またそれが一つの目的でもあったので、それが達せられ、館側としては満足し

ている。さらには、自分でも飯能焼を所蔵しているという方で、わざわざ持ってきた方や、調査に来て欲しいと依頼された方もいた。市民の関心も高かったように、このようならばいいやまで、この元にあつたことに感心されて帰られる人も多かった。



四、今後の課題

展示終了後、次の特別展の準備と並行して、少しづつ調査の成果をまとめていく作業を進めていった。

具体的には飯能焼の台帳の作成である。今回の調査で判明した飯能焼一点一点についてのカードを作り、写真や教育委員会文化財協力の協力を得て、とった図面を添付し、個体の特徴、法量などを記入したものである。また、展示開始後に判明した



平成6年度 原窯試掘 粘土と陶片が敷きつめられている

所蔵者を新たに所蔵者の台帳に付け加えた。その結果、未調査のものを含めて団体を含む二五人を把握し、三三〇点分のカードが館に資料として残ったことになる。

今後の課題としては、まず飯能焼がどういう内容をもつ。やさきもの。であったかを明らかにしなければならぬ。器種・絵

付け・素地の特徴、使われている釉の種類などをできるだけ具体的に把握することによって、飯能焼と判断できる客観的な基準を設定する必要がある。

そして、それは明かな伝世資料が少ない以上、窯跡の発掘調査においては他に方法はない。だが、それが可能となる環境は整いつつあり、大いに期待でき

る。これも飯能焼展がもたらした波及効果といえよう。また、江戸などの消費地の遺跡からわずかであるが、それらしきものも散見されるようになってきた。それらの分析と同時に、市外の文書資料なども調査すると、流通についての手がかりが得られるかもしれない。

また、山王焼、熊井焼、茶堂焼、白子焼など周辺の諸窯との関連性、さらには矢嵐窯や河原毛久保窯と原窯とのつながりなど課題は多い。

これらの解明は飯能市郷土館に課せられたテーマであると考へる。地道に取り組んでいきたいと思う。

最後に、この展示会を開催す

発掘調査の

出土品から見た飯能焼

飯能市教育委員会生涯学習課

富元 久美子

埋蔵文化財の調査という観点から「飯能焼」をみた場合、「市内の江戸時代の遺構からは「飯能焼」はほとんど出土してはいない」ことが、最大の特徴としてあげられます。

なぜ、地元の飯能の遺跡で、「飯能焼」が出土しないのでしょうか？

高価で一般庶民には、手が届かなかつたのでしょうか？ 飯能が郷に行き渡るほどの生産量がなかったのでしょうか？ あるいは、地元ではなくもつと別の市場（例えば「江戸」や「川

越」）に出荷していたのでしょうか？

「飯能焼」は、「幻」といわれ、製品そのものの器形・デザイン・技法・粘土に始まって、窯の数・規模、職人の数、生産システムと出荷システムで、不明なこともだらけです。

しかし、実際の「窯」が調査されていない現状では、これらの疑問に対する答えはなかなか出でてこないのではないかと思います。

反面、「飯能焼」が、遺跡から出土していないことも、ひとつの事実です。この事実から何が導きだされるのでしょうか。

飯能市内の

江戸時代の遺跡

飯能市内では、平松の張摩久保遺跡で江戸時代の遺構・遺物が発見されています。



張摩久保遺跡出土 “陶磁器類”

第一五次調査では、地下室から、硯・キセル・寛永通宝など

に交じって、大量の陶磁器が出土しました。磁器は、一六九〇〜一七八〇年頃、伊万里で（実際には有田や波佐見産なのです）、総じて「肥前陶磁」と呼ぶで生産されたものであることがわかりました。

飯能焼原窯の閉窯は、最も古い説で天保年間（一八三〇〜一八四四年）とされていますので、これらの陶磁器は、飯能焼が操業する百年近く前につくられ、使用され捨てられたこととなります。つまり、江戸時代前半の平松村（ごく一般的な農村であったと考えられます）でも、伊万里の磁器や瀬戸・美濃産の陶器を、容易に手に入れることが出来たといえるでしょう。無論これらの陶磁器はいわゆる「下手物」と呼ばれる日常雑器です。

実は一六九〇〜一七八〇年という年代は、伊万里で国内向け日常雑器の大量生産を始めた時期にあたり、張摩久保遺跡出土の陶磁器とそっくりなものも、「お江戸」を始め関東地方の各地から出土しているのです。

つまり、飯能の村々は、原窯閉窯以前に、伊万里や瀬戸・美濃製品の流通圏にしっかりと組み込まれていたようなのです。張摩久保遺跡第八次調査では一七〇〇年代末〜明治初期頃の陶磁器が見つかりました。この

時代、既に原窯は閉窯・操業していません。しかし、やはり遺物は伊万里・瀬戸・美濃中心で、かえって陶器より磁器の出土割合が増える傾向にあります。

このように見てみると、幕末に閉窯した飯能焼が、伊万里や瀬戸製品に独占された市場に食い込むためには、相当な努力を要したのではないのでしょうか。

周辺地域での

飯能焼出土例

地元ではほとんど出土しない飯能焼ですが、遠く江戸の新宿区では飯能焼の出土例が報告されています。また、川越や東村山の遺跡でも出土しているようです。いずれも、膨大な量の伊万里・瀬戸・美濃製品に混じって、わずかな量ですが確実に流通していたようです。

関東地方の土はローム土が多いため、陶磁器生産には向いていません。しかし、一九世紀初めには、原窯閉窯と時を同じくして笠間や益子でも窯業生産が始まりました。これは、大消費地「江戸」の市場をにらんでの、殖産・興業の流れととらえられます。

飯能焼は、高級嗜好品ではなかったと思います。しかし、白くて丈夫な磁器に対抗するためのキャッチフレーズとしては、その「風雅な味わい」が強調さ

れたのではないのでしょうか。



張摩久保遺跡出土「瀬戸・美濃産陶器」

窯跡調査の必要性

飯能焼に対するもう一つのアプローチは、窯跡の調査です。

昨年、郷土館で行われた『飯能焼特別展』により、飯能焼研究の気運が盛り上がり、かつて原窯があったとされる地域の一角で、二回の試掘調査を行うことができました。

発見された遺構は、「窯」ではなかったのですが、窯跡関連の遺構で、素焼きの陶器破片を厚さ十センチメートルにもわたって敷き詰めた、非常に興味深いものでした。水ひ場（水に沈澱させて陶芸

用の粘土を作る施設）ではないか、とも言われていますが、現在のところ用途は不明です。

この遺構からは、コンテナ一箱分の飯能焼破片が出土しました。主に素焼きの破片で、釉薬を掛ける前に（中にはイットチン描きまで済ませてから）捨てられたものです。素焼きの破片ですから、よその産地の製品が紛れ込んでいる可能性はありません。

これらの素焼きのなかには、波千鳥片口や瓢箪小鉢など、飯能焼特別展図録所収伝世品と完全に一致するものが非常に多く含まれています。言い換えればそれらの伝世品は、疑問の余地なく、「原窯で焼かれた物である」と考古学的にも証拠づけられたこととなります。

また、伝世品には見られなかったイットチン意匠や器形が発見されることにより、飯能焼の特徴がさらに鮮明に浮かび上がってきます。

窯跡付近の調査を積み重ねることにより、矢風窯との関係も含めて、飯能焼製品の全体像を明らかにすることが出来ると思えます。その上で、各地の遺跡出土品と照らし合わせ、飯能焼の流通範囲や消費地での評価に迫っていければ、と思っ

以上、「飯能焼」に対する考古学からのアプローチの現状を紹介しました。

『飯能焼』解明は、史学のみならず、陶芸や美術的な視野も含めた各界の方々の共同作業によってなされるものと考えています。郷土館がそのターミナルとなつて頂ければ、幸いと存じます。

また、明治以後閉窯を余儀なくされ実態がわからなくなつてしまつた諸氏と異なり、飯能焼がその研究の足掛かりを残しているのは、ひとえに飯能焼の四散をふせいだ研究家の方々の尽力によるものと考えます。



「簡描体験」にて

【簡描】

竹筒製のものに口をつけて重力を利用して白絵土を出しながら描く方法。

【イットチン描】

柿渋をひいた紙で作られた円錐状の袋に真鍮の口をつけ、袋を指で圧して白絵土を押し出しながら描く方法。





●五月例会(%)

飯能焼はやわり
講師 尾崎泰弘氏
(郷土館学芸委員)

富元久美子氏
(市教育委員会生涯
学習課)

※友の会共催

●六月例会(総会・%)

記念講演

「出土古銭の歴史」

講師 県立歴史資料館館長
栗原文蔵氏

◆郷土はんのう 第十四号発行

●十月例会(%)

秩父方面バスツアー

講師 金子仙太郎・内野博
司氏

鉢形城・法善寺・県立自然
史博物館・大塚古墳・和銅
採掘遺跡・浦山ダム



●一月例会(%)

＊事後学習会

自然と歴史

講師 内野博司氏

秩父の地質について
講師 金子仙太郎氏

●三月例会(%)

わらの民俗

講師 島田欽一氏



●四月

野口観音堂について

講師 野口正元氏

●六月

総会・記念講演

講師 県立歴史資料館歴
史資料室長
吉田 穂氏

「郷土はんのう」第十五号発行

●十月(バスツアー)

歴史散歩

岡部町・児玉方面

※会員以外の方でも、是非
お気軽にご参加下さい。

●十二月 事後学習会

●二月
地場産業シリーズ

(入間市博物館見学を兼ねて
企画致します)

★飯能には、飯能郷土史研究会
をはじめ、加治郷土資料同好会、
原市場史話の会などがあり、ま
た、南高麗にも郷土史研究会が
誕生したと聞きます。

お互いに話し合いながらやっ
ていくのもよいのではないでし
ょうか。

手始めに、十月のバスツアー
(歴史散歩)では、すでに行っ
た加治の皆様のご意見を参考に
企画してみたいと思えます。

また、会員の皆様も、ご意見
・ご要望がありましたら事務局
までお寄せ下さい。

◆◆◆ 新入会員紹介 ◆◆◆

田島 和子 飯能三二五(一八)

赤田 康二 二川寺五六一(一三)

大野 豊治 坂石四四〇(一)

(敬称略)

◆ ◆ ◆ 今ただいま、会員募集中 ◆ ◆ ◆

当会では広く会員を募集して
おります。

歴史・民俗等、興味のある方
どうぞお気軽に事務局まで、お
申し出下さい。

事務局は、飯能市郷土館内に
あります。 ☎七二一四一四

郷土史研を母体にして
いろいろなサークルが
生まれました!!

○その1 ビデオ制作委員会

飯能の文化財を撮り続けてお
り、今年も、名栗川に沿って一
原市場地区周辺(Ⅲ)(二十六
分)が完成。

飯能の美しい風景と文化財が
見事に写し出されています。
(定価二千円。特別に郷土史研
・友の会会員の方には一割引に
て頒布。)

○その2 仏教美術勉強会

美術史に沿って、仏像や寺院
建築の流れを追求していきま
す。フィールドワークを重ねながらの
勉強は、奥深いものがあります。
(その3・4は次号で)

なお、詳しくは郷土館にてお
尋ね下さい。

計 報

滝沢 充氏

市内小中学校長、富士見公民
館長など歴任なされ、また、郷
土史研にも深いご理解を頂き、
郷土はんのうに「中国訪問の記」
を執筆して下さいました。

水野 兵三郎氏

原市場の民生委員もなされ、
地域文化に貢献なされました。

例会には数多く出席いただき
郷土史研の良き理解者でもあり
ました。
心よりご冥福をお祈りします。



五月の下旬、水芭蕉を訪ねて
長野県の鬼無里村に行つて来ま
した。長野県は糸魚川一静岡三
造線と中央構造線によって、三
つの地質的に立ち切られていま
すが、鬼無里はフォッサマグナ
地域にあり、ゆるい曲や浸食・
断層などによって出た峡谷が、
まるで地質博物館のように、地
球のドラマを物語っていました。

昨年はずきさんと秩父地方に
巡りましたが、これも同じ様に
自然が生きた博物館となつて、
私達に数百年という年月を語り
かけてくれました。さて、今年
の歴史散歩は……楽しんでし
ております。(桑)

郷土はんのう 第十五号

発行日 平成七年六月二十五日
発行所 飯能郷土史研究会
飯能市飯能二五八一
飯能市郷土館内(〒374-0104)
☎四一九七二(一四)

題 字 小谷野 寛 一
表紙写真 尾崎 泰弘
写真説明 大野 聡 子